

【水の作文大賞】

水の音が教えてくれたこと

熊本県 真和中学校 三年 小松 良太郎

昨年の夏、熊本県の球磨川で、家族と一緒にラフティングを体験した。その日の天気は快晴で、流れる水の量こそ少なかったものの川幅がとても広く、その雄大さは圧巻だった。

ボートに乗り込んだ直後、川の音が耳に飛び込んできた。ざあざあという水の流れ、岩にぶつかるバシャという音、パドルが水をかくときに立つチャップチャップという小さな音―それらすべてが重なり合って、まるで自然が奏でる交響曲のようだった。最初はその音に胸を躍らせていた。

しかし、しばらく下ると、空気が変わった。川岸に、豪雨災害で倒壊したまま放置された家屋が見えた。ガイドの方が教えてくれた。「あの家、まだ手がつけられていないんです。あの時、川に流されて行方不明になった方の遺骨が、今もこの川底のどこかに眠っているんです」。

その瞬間、耳に入っていた川の音が、まるで別のもののように聞こえた。さつきまで活気に満ちていた音が、急に重く、不気味に感じられた。自然はこんなにも美しく、そして残酷なのか。僕はただ川に揺られながら、その小さな「叫び」を聞いているしかなかった。人間の小ささ、無力さ、不甲斐なさが体の奥にしみじみと染み込んできて、震えが止まらなかった。

それでも川は、黙って流れ続ける。どんなに人が流いても、悔んでも、その音を止めることはない。ただただ、過去を飲み込み、未来へと進んでゆく。その冷たさが、逆に自然の偉大さと、そこに対する畏敬の念を僕に与えてくれた。

旅の帰り道、僕たちは近くの山に登った。頂上で飲んだ一杯の水の味は、今もはっきりと覚えている。汗をかいた体に染みわたるような冷たさ、のどを潤す感覚。そのとき耳に入ってきたのは、風が木々を揺らす音、小鳥のさえずり、そして遠くかすかに流れる沢の音だった。

その音と水の匂いが一体となって、感動の記憶として深く僕の中に刻まれている。水は人の命を奪うこともあれば、生かすこともある。山登りのあとに飲んだその一杯が、こんなにも心に残っているのは、水が与えてくれる恩恵を、僕は球磨川の体験を通して知ったからだと思う。

自然の音は、目に見えない感情や記憶を呼び起こす。球磨川の激しい流れの音、静かに眠る川底への想像、そして山頂で飲んだ水のやさしい音。それらはすべて、僕に水の恐ろしさと美しさ、大切さを教えてくれた。

これからも僕は、水の音に耳をすませて生きていきたい。そこには、自然と共に生きる僕たち人間の姿勢が、確かに映っているのだから。